



志川 実介

『播磨鍋 3 国衙の庄、津田村』

姫路城から東へ1 km、JR播但線、京口駅西の小さな公園に旧鋳物師（いもじ）町跡と書かれた石碑と、もう一つの黒い御影石、町名由来記念碑があります。その由来碑によると、

『王朝時代からこの辺り一帯を津田村と言ひ、その中の神屋の北裏に位置し吹屋といった。古く佐用の砂鉄から鉄をつくり、播磨鍋・播磨針を京都で売り出し非常に名高かったのである。天正7年（1538）藤原弁随（ふじわらべんずい）頭領の鋳場を芥田家久が買収して野里に移したので、その後は野里が鍋・梵鐘（ぼんしょう）・灯笼・塩釜・鋤鍬（すき、くわ）等、鉄鋳品の中心的存在となった、以下略』。

播磨の国、国衙の庄、津田村は国衙に近く微高地で、鋳物工場に適した所です。平安時代から藍染めの布（カチン染）で有名だった、清少納言の『枕草子』にも見える『飾磨市』まで、1 km足らず。鍋の販売にも適した場所で藤原弁随もここで鍋を作り『飾磨市』で販売したのでしょう。また、播磨国総社に姫路市の文化財に指定されている銅鐘があります。その銘文には大工津田村内記石根丸、小工内記四郎左衛門が永正3年（1506）に制作したことが記されています。（推定重量約330kg）

同じ鋳物師でも日用雑器である鍋や釜などを、市場で販売する職人は製品の重量がおおむね5 kg程度より小さなものを繰り返し、繰り返し、大量に作るのを得意とします。梵鐘など大型（約200kg以上）の製品を、注文を受けてから一品毎に作る職人とは技術面・生産形態でも受注形態でも大きく異なっています。特に大きな梵鐘の鋳造には鋳込み時に、大勢の職人達が必要になります。たとえば豊臣秀吉を祀った、京都方広寺の梵鐘（慶長19年（1614））では136基の銅を溶かす甑（こしき）とそれに風を送る踏鞴（たたら＝踏みふいご）、全国各地から集められた、総勢3千人にのぼる職人達と鋳物師が大梵鐘の制作に奮闘しました。使用した銅は64トンと伝わっています。

技術の先進地であった大和と河内丹南からいつごろ鋳物師達が播磨に定住したのか判明しませんが「七十一番職人歌合」明応9年（1500）成立と推定、には『播磨鍋』が登場します。播磨鍋・播磨釜は室町戦国時代、15世紀までに全国ブランドになっていたのです。

大きな梵鐘などを作る鋳物師はその工場は微高地に立地します。その理由は、地面に大きな穴を掘りその中に鋳型を設置する必要があります。穴を掘ると水が湧き出すような地域は不都合なのです。

来て！見て！ふれて！
ふしぎ体感

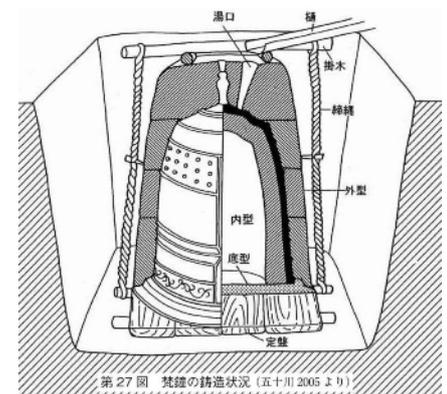
『鉄のふしぎ博物館』



町名由来記



総社の銅鐘



第27回 梵鐘の鋳造状況（五十川 2005より）

梵鐘鋳型設置